

〈紹介〉

Michael Harrington

The Other America; Poverty In

The United States

——現代アメリカの底辺——

井 垣 章 二

ジョンソン大統領は、六四年一月八日、その年頭一般教書において、「アメリカの全家族の五分の一は基本的な必要をみだすに足るだけの収入がない」ことを明らかにし、「政府はここにアメリカ内の貧困に対して無条件全面戦争を布告し、私は議会および全国民に対して、この努力に参加するように訴える」といった。全世界は、「繁栄の国」アメリカに、ケネディ暗殺によって示された社会「不安」に加えて、深刻な「貧困」問題のあることを、あらためて思い知らされたのであった。ガルブレイスが、その著「ゆたかな社会」において、現代貧困の新しい意味を訴えたのはほぼ五年前のことであった。しかし、その比重は、社会発展の側面、明かるいアメリカにおかれており、貧困の問題はそれに関連的に位置づけられたにすぎない。ここでとりあげようとするハリントンの著書は、貧困の問題に真正面からとりくんだ「貧しい」

「進歩からとりのこされた」「暗い」アメリカの分析である。このハリントンは、現代における貧困の存在の大きさと独自性を指摘した功績をたたえながら、なおガルブレイスは、問題を「この国（アメリカ）の良心とイマジネーションに挑戦するほど大き」と考えていない」（二ページ）という。

著者によれば、よく知られたアメリカは「ゆたかなアメリカ」であるが、知られないもう一つのアメリカ（The Other America）「貧しいアメリカ」があり、それは実に人口の四分の一、四、五千万にのぼるといふ（この統計的根拠も示されている）。しかし、この大量の貧民は、都市であれ農村であれ、一般の通路からわきへそれて置かれることによって、かつてのスラムに堂々たる改良住宅群がとってかわることによって、あるいは、着るものについてはゆたかなアメリカが下層階級にもその恩恵をあたえることによって、こんにち、かつてないやり方でかくされておられ、ますます見えにくくなっている。かつて中産階級は貧民とより接近して居住していたし、クリスマスにはスラムに入りこみ、慈善団体を組織して、貧民に身近に接する機会があった。しかし今は、彼等は、そこだけは「ゆたかな」郊外に住み、見えない貧民には情熱の注ぎようもない。そのうえ、かつてのスラムに存在した政治組織は全く消滅し、政治家はその住民に全く意をかけなくなり、かくて貧民は他の社会から全く隔絶され、絶望の底に沈んでいる。未開発地帯の新興国においては、貧困はもっと大量で極端である。しかし、こうした国々は、多くがゆたかな暮らしをしており、

貧困がそう極端ではないアメリカよりは有利な点をもっている。そこでは「貧困への戦い」は社会の総力を結集するに値いする問題だからだ。「不幸にして貧民に生れるなら、大多数の人々が同じくみじめである時期をえらぶべきである」(八ページ)

以上、第一章「かくされた社会」(The Invisible Land)は、貧困はかくされているがゆえに、社会の総力を結集する問題にならないということ、ゆえに第二章から第八章までは、見えない貧民をほりおこし、見える貧民にする仕事に集中される。

第二章では、ホテル、レストラン、病院における、年収千ドルぐらいいかならない未組織の下積労働者や、オートメーションに駆逐されて、また元の貧困にまいもどった黒人労働者などの運命を描き、統計の問題としては、過去三〇年の間にホワイト・カラー労働者が四一%から五三%に増加したという統計データは、たとえば、五三年から五九年にかけてブルー・カラー職業は一五〇万削減しているにかかわらず、ホワイト・カラー職業は六〇万増加しているにすぎない事実を考慮する必要があり、表面的には経済の成長と民主化とみえるものの背後に、貧困の増加があることを指摘する。場面を転ずると、農村には都市以上の貧困がある。「人類の歴史において、かつてない収穫をあげながら、しばしば飢えかけている」(四〇ページ)農民、アパラシヤの美しい自然にうもれた少しばかりの土地にしがみついて生きる山間の人々、大経営に圧迫される南部農民、それに、牛のようにトラックに積まれて、女子供なら一時間五〇セントで、灼熱の下、一〇時間以上

The Other America; Poverty In The United States

も労働するカリフォルニアの移民労働者などが、第三章の主人公である。第四章「黒い肌ゆえに」(If You're Black, Stay Back)では、発展産業は、不熟練、無教育な労働者として黒人をしめだすことによつて、法の上での平等と機会均等をこえて、強力、暗黙の差別システムは生きていと主張し、第五章では、自発的な貧困としてのボヘミアン(ピート族)アルコール中毒者などが、そして第六章では老人の問題がとりあげられる。彼によると老人(六五歳以上)人口の少なくとも半分は貧困であり、ことに四分の一にあたる人口は、年収わずか五八〇ドルで、荒蕪した安アパートに病身を横たえ、天気の良い日街角まで歩くぐらいが唯一のレクリエーションである、他の世界から隔絶された、孤独と絶望の日々を送っているという。第七章では、ガルブレイスの「個人的貧困」(Case Poverty)を批判し、精神欠陥者、脱落者のゆえの貧困でなく、貧困なるがゆえの精神欠陥者であり、貧困の劣悪な環境条件は精神をもねじまげることが、最近の諸研究にもとづいて明らかにし、第八章では、現在のスラムは、大社会への一時の停車場としてのかつての意義を全く失い、古くからの敗残者と国内から流入した新しい貧窮者群との混屯とした集合体で、絶望が支配し、都市計画による改良住宅は必要者の一〇分の一ぐらいしか建てられていず、それは貧民をコミュニティから根こそぎにするうえ、そのホールやエレベーターは小便や排泄物のおいで満ち、新しい衛生的環境の中で貧困は生きており、それが立体化されたにすぎないと、貧民対策の不備を追求する。

最後の第九章「二国の民」(The Two Nations)は、問題の認識と根本的対策についてである。彼は、まず、「貧しきがゆえに貧しく、貧困なるゆえに貧困にとどまっている」(二六〇ページ)という貧困認識を訴える。データは示され、進むべき方向も明らかにされている。「歴史において、人々が貧困を終結させる物質的能力をはじめもったこの瞬間において、人々はそれをする意志をなくしているのだ。」(二五九ページ)明らかにこれはアメリカの恥辱であり、そして、この恥辱を終結させ得るものは、何よりも連邦政府であり、もう一つは労働運動である。ジョンソン大統領の教書に、著者は目を輝やかしたことであろう。しかし、彼自身指摘したアメリカ政治における強力な保守勢力、複雑な政党組織を考えると、「貧困への戦い」はなお多難であらう。

著者は、経済学者でも社会学者でもなく、フリー・ランスのライターである。労働運動家というべき人で、かつて社会事業に従事したこともあり、文筆活動と実践を通して貧民解放にとりくんで来た人である。彼は、スラムを歩き、カリフォルニアの移民セクターを訪れ、本書をかいた。調査研究というには散漫であり、ルポルタージュといふべきものである。しかし、農村貧窮地帯の考察には、農村社会学者ルーミスなどの名前もでてくるし貧困と精神障害をあつかった第七章は、所得分布の統計分析を行なった付録とともに、最新の諸研究をとりいれた一つの研究論文をなしている。彼は公式の統計データによりながら、数字の中に消え失せた貧困の切実さを人の目にさらそうとした。彼は、たとえ暗い

側面が強調されすぎたとしても、貧困の存在を忘れたこんにちのアメリカにかんがみ、道徳的立場から、それは意図するところであり、また、貧困の描写には、社会科学者ではなく小説家こそ必要だとも述べた。灼熱のカリフォルニア農場で、危険な仕事のために五〇〇人もの子供が、毎年、片わになつているといふこの六一年の報告や、四歳になつた子供に、それ以外にたべものがないので、乳房をあたえる母親の物語などは、スタインベックが二十年前に描いた「怒りのぶどう」に劣らぬショックをあたえる。本書の主張点を一口でいえば、「この現実をいつまでたってもみているのか」ということにつぎる。(一九一ページ。ニューヨーク、マクミラン社、六二年初版。六三年、第三版を使用した。一九六四・二・一一)